妙ゝ奇談

二

へ遠13
1866
3

へ遠13
1866
3

周清外史

日本馬杉繫先生著　全部廿二卷
清　王治本先生閲　一合　十三冊
定價三圓廿五錢

近世所行支那略史類記事過簡ニ實ヲ省キ怪異百出荒誕無稽讀者之厭フ先生慨然トノ筆ヲ抽キ上古周ノ平王ヨリ下清ノ今日ニ至ル治亂興亡謀戰忠邪跡歷々詳記シ怪異ヲ削リ荒誕ヲ糺シ姓氏ニ因テ編フ立テ日本外史体制ニ擬ス名テ周清外史ト云フ弊舗之ヲ先生ニ請テ梓ニ上ス世ニ播ス四方讀史ノ各位最寄ノ書肆ニ於テ此書ヲ購求シ賜レ其直筆精妙ニノ疎漏ナキヲ審ニセバ幸甚

書肆　東京日本橋區本石町貳丁目　江嶋喜兵衛

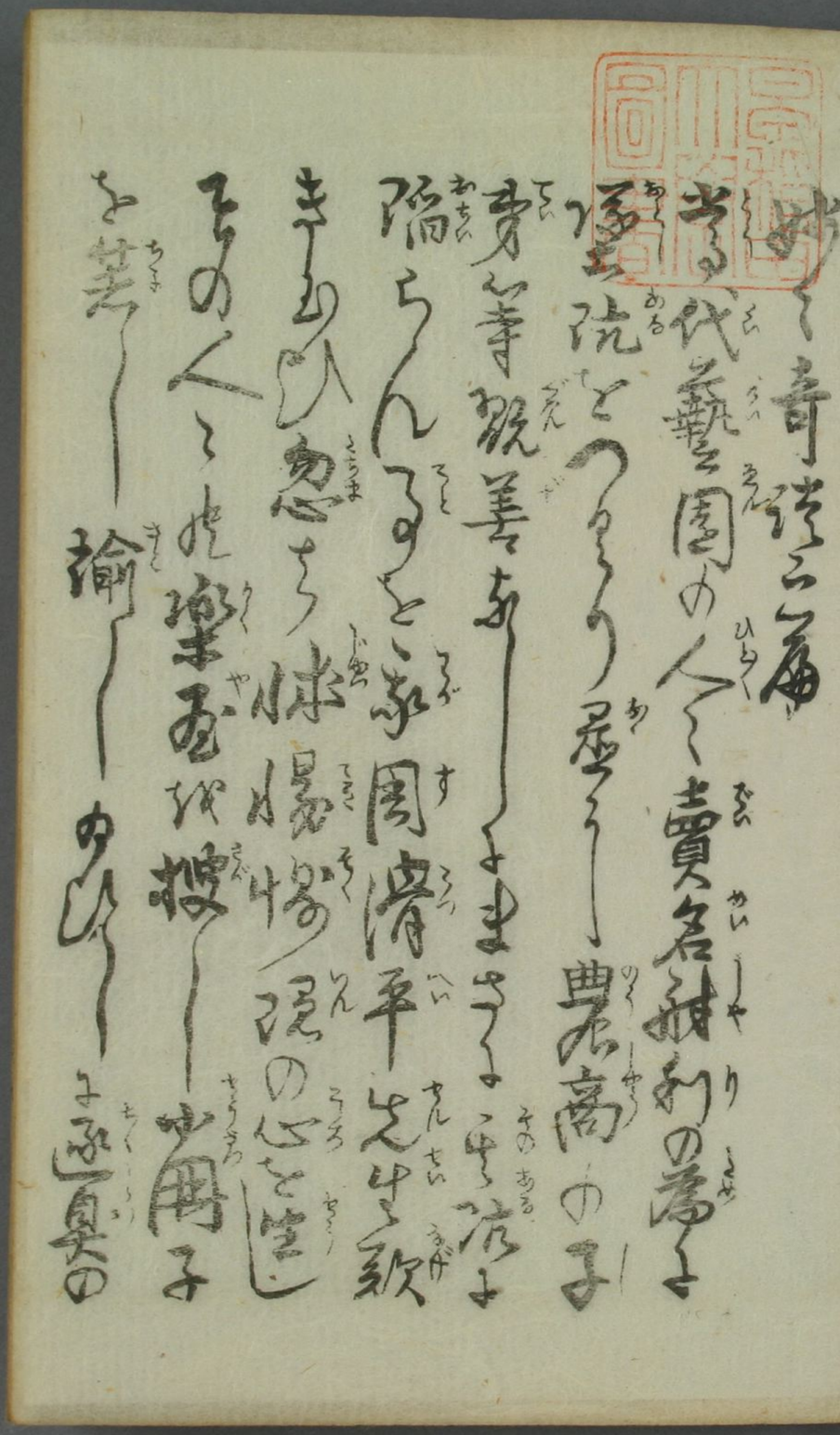
序

天下無定名古人既言之矣今人見真景曰如畫見畫景曰如

真譚夢事曰如醒譚
醒事曰如夢故見毀
而增聲聞見譽而被
嗤罵者不鮮焉然則

天下豈有定名乎由
是觀之真耶畫耶醒
耶紛々毀譽固類乎
是而不足為損益焉

此編之作者。譚浪無
度亦何足造怨府乎
哉。大平萬年。長至日。
水鏡陳人撰。



時人是紙写しうつしく紙
費なく廣くゆき
とゝまる中ゝ
要の門や都ゝ
ゝよ州ゝまり事
軒の星ゝ
又西ゝ着ゝ
ゝべゝ

ゝ是紙の時ゝ
ゝ身を偽さゞしめん妙
ゝば老切る又自ゝ
家系の清代乃一助
是宇宙の海を
ゝ毛や世ゝ
ゝ世話ゝ
ゝ中乃ゝ

あひ思世にこそあれど結如是實々の物
かゝりとハ穆公正孝の碑論舌頼うし
いわらあれし先く評判こく次覧える
まことに書の末戸口まで洒無剥
ましく序やするものを

門人

富喜 記拵

学者必読
妙々奇談 後夜の夢

周滑平先生著 門人 五覧逼 無塁鑑 全挍

第一回 泉岳の義談

すゞ周滑平曰開闢以来造物といふ作者ありて年々かはる世の中の新狂言。猫も杓子も知らざる時の流行に押しおしと手ぐすねひきて己が悪智恵を振ふい実を古今未許多肺色。天地間一大戯場と云しも毛唐人の

寐言なりしハ。芥子坊の親分ゲ。今云なる我つて
ぐれ云を打のひ。うれしなくと眠に付く時前編のチヨン
く。幕引をしたる拍子に。チヨニチヨチヨニと木
の音にて。惣躰もの仕掛夕幕の趣向もとく時の
為。ゴオン

看経の音木魚乃拍子よふしく幕明く
負石良雄寶斎を説破して泉岳の旧墟に詣り
されバ義士なく不審して今銘を子某より何度

其出世を喜びけれバ。良雄曰なく方々のごとくに
吽しすべき所。急にな立するもの也。その義に及
ぼず只今その子細を申さむ。抑も寶斎と云
狂老なく。我等か事功を碑に彫り立する事。
いかにも我ん心に掛りしかりしれくその由へを
各方別体一心の忠義に依て。その志を遂する事
なる事。我一人事を成したる様に書なしあれバ。
各に對して甚面恥かしく。是をもつて往々も

ふ〳〵ちね孟生一ト通り分説せ〳〵る。夢幻と
述〳〵通りくと慇懃ゝ中さんれるとき。四十六
士一同よりれいく。恐き入る体接拶。未だ微力
ハ一矢の如く。羽あり鏑あるその利説〳〵くど
き。折〳〵折るべく。束ねるの数十本烏獲も
折るの能はん。然〳〵て皆用よ当てその利始
〳〵全〳〵。そ度見を歩ね用ひらるよあく〳〵ばいて
その全功をおさむ。寶齋が眼力は石よ歩りたるまゝ。

無理あ〳〵ばと云ふ。惣左門進〳〵出〳〵曰。負ふ度作
の通り。未だ書き尽ず碑のを世よ。あげうる
るよのあ〳〵ばとしくば。宝齋の志を実を未だ書を
楯ふ。此の中の仔判を盛り〳〵て。彼り〳〵付
の筆法あるさど。群鶴刻料よく手づく手也
の正面拓。亟理賣手押付け。閑〳〵写よ合せて
る抑の〳〵。牛〳〵文を〳〵人を欺き
ちさんとの正存ち〳〵よねのかよ拓きるを。

ふせん。初よ滅亡の天魔鬼神を感ぜ〜むと出
後よ児女輩を感せ〜むと。書〜るその照應の拙さ
ま〜ぬ文といべ〜。大高原吾笑を含〜て拙き
注義の作者がを〜〜の孫讓日本の大屋と
ま〜る。室斉同様の眼のつけ方あれど。戦国の
時。呂この孫讓を君ノ者ヲ報んと千辛刻
苦せ〜〜。負石迄の佯狂偽顛孫讓が赤誠
〜〜。おのれ〜〜。むくとくば負石曰その

ヲよ〜我おのれ〜ヲ〜れど。芳孫讓〜〜〜
云捨せ〜〜〜。依〜〜世人不克の字論の〜〜〜。
室斉の作文の疑〜。千眼一統の文よ拙き不拙
ま〜ヲと云〜〜。今評よ〜れを説〜〜。そ〜彼
孫讓。古今無比の志義士と。史ヲ著〜人よ
も膾炙さ〜〜〜。我邦武の魂を〜〜〜〜れを
〜〜〜〜〜。俠者の名を好むこの〜〜義を
耻ま〜ざるこのあり。元是孟子の斉宣よ

蓋く成る。犬る土芥ゑく冠纓の言より。ん始遠さ
るものゝ。孟子の云いその時の。出奴駅室王への学
問上ゆく。ゆくよ成てのるまり。危挽予刎后。
唐予刎冠と。古く見へたりさど。皆是無主北
風俗ゆく。君臣の差等あきゑゆ見斟の如きくゆ
ゆ云出るものゝ我弥武の皇法ゆくへ。かゝの
紀ゑ心ゆ。さめるゆ。君ゆく臣とせきゆる。
臣ゆく君とせぎゆるゆ。そん危氏苟氏を

智氏よ滅さん。智氏い趙氏よ滅さる。ゆゆ張襄
危氏よ報ゆる。ゆゆく。ゆとあゆ。他人よ仕ゆ
べきよ。何ぞ生存るものの仇ある。智氏よ仕へく
冠纓の報を朝せゆ。犬るの祝よ報ひたりや。
智氏ゆる結。死べゆ。そ死ゆ。趙氏よ執
ゆ又死ゆ。二家釈をものゆ。ゆ志を
めんとゆ。ゆく刺ゆ中るゆ。
後仇の用ゆ。趙氏よ。ん。ゆ刺ゆて

中ごろ。何ぞ生ずる趙氏よりこれ。孫ろ歩
刺さんで。狩りばかりでは世の君ろ
仕へ二心を懷くものの様。慌ててめんと云く。
大借よ趙氏が利窟よつまり。その孫狗を
踏り上り。三度刺し今我智伯と報ずと云て。
自殺しうる。畢竟芝居狂言の如く一通り
太義の様よ変ゆるとよく考へれば義を主ろ
べ。又恥を主ろざるよ近ごろ太

史公と云。作者こゝを賞し史よ記せり。
歴代是を太義士と云ふ。又押しよ音いと
ゆる万葉の国なり。智氏よ仕へ人の義子人
主ろして豫讓が如きもの。かよ多くその志太
義よ似ることを以て。文を表とする毛庵人等。
孤ろしく知るよ。書記せるものこ万
葉の大国ろして。豫讓ろ如き太義の切要する
ものすら稀なるゆへ。廣大よ云習ふ。元是

堯帝とて。万邦を治し給ひしが。舜を百姓より引立
て。舜子を殺さんとしたりしかども。代々孫
百人強るゆゑ。王莽曹操ぶやうさ恐るる者
堯舜の裔なりを引て。ちやうをいひ出る。お
もへば陽まさしく漢朝。高祖より我神武
雲霧の遠き。そもそも我国は天地一番分れし日月
位宝は君臣の正逆。正しく君たりしかども
臣下は孫反窺偷の心あり。伝教我君は
綸旨数万の言を解し。一城主となり。彼智氏の
こぶ迄。一勢孫れ来る同じ。その一勢孫
なり。誠に義万の士。四十七負出てるる。実に
弁武乃ときさ古国なり。かるが故ふぶる。
眼をつけて他文の話。城主ここそ。孫君の服
力とる。大儒の足識とるやべりれ。宝斉が服の付が
美くあるゆ口惜さよ。上ここよけ碑立
亜んるゆ。我ん岐ん岐ん。又先祖より云如

く。各の思ひまいらく。各いこの抑たる中と。奥説
陳べ。説示し給ふ。各霊一同に躍り上
り。誠に志うくと。歓喜する声に驚き起。問
清平が夢を覚たり。
議家の法学士。平貞盛が事功を論
じ。忠と云不忠と云。或いその志
きよ玉く。鶴の翼に不遠ひしなと
と云。皆不川に倩て。一里に

庵主に。近付んを抑ひ。天照弥の
由園に生れ。あづら。唐人の人別に今
ざるを。悔むに。曾遠より。起し
るなり。我大由国の魂を。ろうす
ち。夏石が倫ざる所を見るべ。

受業

五勿　鬼毛織

西国の佛諸
釈迦玉が池の傍に。西向院に立寄り

多人海を言聊方に至り。志佛の吟味
殺さるゝ。為弾まくり。志佛ら
不学文盲なるゆえ。一体志聖堂詩
集の序を出す。北三蕾西も市川も和く。
不文拙者あるゆえ。清らかい本当大な
路なき志佛の義自称の傳なるい洋ら
出るといゝど。北三蕾西が他文の傳出るも
世人の出る所既に小三ら考云ら。北三出く

天下文を知るゆえ。殺るゝ世なる不
文拙者ゆえ也。我れ不
任く揚句の方八大の
舎の備を吟ず。当時諸人が北三蕾西ら文
ず。一枠を賛する人あゝんや。隙ず拙者と見
あるもの。元天下ゆゝしとおりよ。
法朝こゝ不審あれ。説あゝい承らん。膝
元すゝりく。お

みゆ。人い釈る青蓮義の古眼を綱め。みるく笑ひ
ひあぐら。和と本るまを久〳〵。山北よ行く
江戸ッ子永性よ者〳〵を老ありそうも亟
理ふ〳〵。すぐ〳〵与の傷熱ホ。待く〳〵を以る
学皆と学ば。修飾斉家〳〵仏付ぞいえん
や治玉平て不ちゆ。その文を似るとりよ
ま。大体古人の文を模倣ふ〳〵く。素いとも主
ば。丸呑よするゆく。大よ玄味よ違ひ。ちゆ輔併

錯置或と不成語を似う。出るゆく。彼等ぶ
不文批者の一二ば。今試よ侍るべ〳〵。産
と段め磐渡の名段を歩。山峻排両
三声ら成。先小三が不文を云ひ。韓退之が東
野を送る序よりく。天不能自鳴とり
句。及び殷其天機といり句を挿入きる
トいくぶ。発ちて横の甚とりまを。何を
さいるゆ。天をさ〳〵甚といち。発の字

の上にをへて。を撥をさして其と云ども。
漢文の例多あり。是を糸窮といふ。雖然
拙をさして是といはず。発を撥と云字を
仮るべし。尾拙の時る皆を撥の類
むる所あれども。首句に天不能自鳴と
天の字をかりたるが如く撥
を蘊ずるにを撥と云ども。撥を牛
云ども。是を別語といひ又

解牛の体のといふ。莫邪皆天撥之発矣。
の皆といふ字。鳥雷虫風を指す例なり。
莫の字の上にのるべし。漢人いう成不文
多和ども。加拙の拙さるは出也。
是は春六が心に韓文を。拙くと解せぬ也。一体の
人物が嘉ひたるを。
沢は。韓文は万拙自唱の上に偏を立て。
天の作るをいとべ。莫本に合石

と皆不平をもつて詩をいひ。次に人の
悲びその歌哭に不平の心を詩に写すに
世に不遇なるその不平を詩に写すに
あらざるなり。次に四時に随ひて多く蟲鳥風を
見るに天の変あるも。又時に不平のあ
るなり。四つのものに触るゝを俟つてその
不平を伸ぶるなり。あるいは抑ひかたきを
ゆゑ。結句に疑辞を用ひるなり。春六句を以
て

上十二

ものを命ずるに。ふ触
自嗚と出るなり。大成子曾遠く又古昔触嗚
去る。何を嗚るものや。独天眠嗚結
嗚るといふべ。結を嗚るといふ。
べりに共。漢人に加る句法に
先一句に天の地を俯して嗚る者を云ふ。万物
の嗚るその動き殊に人に又出るに豈
結嗚の二字に天眠に属して。

上十二

古昔鉦鼓鳴老人行くらんと
呼るゝと云へば。又結の體裁を備ずゝや。
雲鳥寒雷鉦鼓文風よ配―。雄壯纖麗清
幽と二字づゝ。そ句よ云ゝ。さゝ雲の一時
の〻。雲夢之和と云ふ。倫理をこさ字法
とゝべゝ。又雲の景よゝ纖麗ある風。
然ゝ春の景よ雲夢ある。仕方な
しよ雲の啼くゝを云ゝ。纖麗と云ふ

附ゝそれ雲の啼くゝハ肅殺悲哀
者ゝ呼ゝば。纖麗といべからず。又声の和
すゝ。金石絲竹生物よ。冥鳴風
宣春禽のゝをいゝん地。景金ゝ四時配当
ゝ窮迫ゝゝ。芸播雲人雷と推付ゝ
ゝ菊ゝべゝ。又物の清逝ゝ雪と月と
よ云ゝゝのあゝ。風の聽ゝ雪雲人
偏すべゝ。ゝて嚴冬北風の烈ゝ也。

人の肌に透るを凄幽といふべきか。是又霊胄に
青妻なるは逼迫して。華麗附会しておさ
まのくむ。又天珉名行の一段體裁なし。あらく
傍と異なり。木に竹を続するが如く。点付る
ぬ出なく。天珉はしけれど動むなしば。
別に天珉小侍を継てしる。巻末に為ど化し
そすく。何ぞ窽然と叢うり。検上此部俚の
譜牒を出すをせん。古人たまく件ける

なれ體裁別に格を疑ふる文義なるべきか。郢戸
まで度に萬殺せしきらをと至極の業とするの
一條も。珉既に天籟を得く待を以く油肉よ
鳴るゆくを知らずしく才を蒙しられ
を候りくほくしたとひに現郢戸度を
や諸度の著々に天とぞさと称めひし
まからのをしこそらん云につくざるを
うふくせ大概之萬西が文を亦一等を下

小児の戯のごとし。徧ねく星ばとしくばる
ち珉や五三等を百之二百之づゝ出して蓄
西の文を作りて貴ぶよりまされば彼
等が如き是時の耳を却ぞろうして却のんと
法華湯一杯五銭を一炬法鼻紙を捨てて
曰自其同者視之則結言其志也こゝに自其
異者視之則雅頌之聲を模
倣して偽造の妙を

主ざるものゝ莊子是と同とお對して言
を立るを似ようとして同をまゝて論
じ是を客とし此序い返して同是を對論
するを軒主の法なり。試に莊子が文
例を以て此序を推して見るに西が文に
て法を以て王駘に比して是同を立る
是同を立るを笑ひ
ば莊子が用法と題齣すなり。此序を

詩の美因有るを論ずる。詩は美因する者を
論ずるなり。故に其の人に自て其視と
いふ字通じ難し。又試に蓋し文法
より從ひ、一詩の中に美因の二字あるといふ
を以て、莊子の文を推して
其一人の主張なり。美因の中の二字を
通じて解すべし。強て其別を
全具の人に美あるを以て。美者云ふべ。
故に以其異者言之と書べし。況自其因者視之
異者視之といふを以て況自其因者視之
とも。主張が心維と因とすれば。これ美因は他
人の主張に美因ある者を。さて
通じて視る。其の上につきて論ずる得べし。
書面が伝持すれば。詩に美因二
つのものなり。詩を見るといふなり。
きこえぬ文章と成る。又詩の志といふ古

今、国ゝと。国風雅頌漢魏六朝唐宋元明
の風調を更ゝすゝ。しかし倫を待ゝび英雄の
傷子を待ゝ志ゝる。その言ゝ尚ゝ。
ち、我い新ゝ書ゝ拙。又国美
どゝ編を記ゝ。此之綱大国と云ふと云句
ゝ。此之愧大異と云ふの句云ふも美ゝ
べゝ。まゝも下文ゝ小美小国と云ふ和
對する句あゝべゝ。あゝ拙

ゝ書ゝ。又於漢魏以後之中。漢魏六朝ゝ
之詩異と云ふ。拙考ゝべゝ。既ゝ
漢魏以ゝと云。又何ぞ漢魏六朝と云ふ
や。又弘仁以来今ゝ新ゝ。
ゝ。
ゝとゝ。ゝ国美大小。中国美大小の
説。古人ゝ詩人ゝ志の国ゝ。その調の美と倫ぞ
ゝ。皆是人の知ゝ所ゝ。然ゝ。天

眠が什集よい毛筋ほどくる。あげうるゆく。
結語又熟語の法あり。是を言法の文とい。
什篇をいく一篇の古体。括くんとあれば。
吾邦歴代の法家より。当今よ知るまで。
彌の変化一あるざるの。是を著て歴代の化
者その志をいよい古今一あるの。調をいく
くて所とすれば同吳の篇を主とする都さ
も立。又天眠が清新と。唱よるの古よ吳る。

ゆもつたよ惜るの拙きすと廣長
舌を振く説きすれば本るる如くを
非を知り学の中乃法よ目明さ子人皆目
子人とやあれどもの代い南く皆目多き
るもと殺息く改面投地恭敬礼拝し
ゆ人ハ小ハ釈そ合掌く志づくと
産を記セるハ燈ハの油をつぐさ埴江寺の
高居よ所りゆ人ハ小ハる

天珉が清狂を唱ふるなり。実に当代敵
なきさうい徒あり。世俗の称する。
何ぞ他の贅語を仕ん。我るに小言
而命門が序をいふくるの声價を
埒し。世書の夢言なるを形
ハ。射利のそしりを逮ふ。天珉の俗心
又彼言人を己れ欺き人を欺き後世和
をもるべしの雪云をも思ひ不名

学を出すると。名を初めとする。浅学乃
子牛無しとあり。是をそしりとす。或
ものつよ入。或い事風を慕ひ。孫子太平
の天地なり。世間の人とあるなり歌なり。
釈する大意の小言人る耳事風と事
べうぐぐ。我先生事子牛と教く曰。
書をそなんく。書と成るなり。あうれ
徒を作りく。徒人とあるなり。あうれ也。

志ある人は此を深く味ひのべし

受業　五大庄　儀

後夜の夢上終

学者必読
妙々奇談

後夜の夢

周濤平先生著

第三回

門人　五覧通
無曇鑑　全校

聖堂の霊談

栗之先生の霊魂乳左太夫の精魂を摂して。
彼が膏肓を計り給へば。坐中
の徒霊一同よりて手を打て。大笑して曰く。
雪斉老度よ。星地雪斉主人の付て時五

之天祇彫魂を飛せしめ。五之山顔無一山
天祇如土民爲と。学よ修業せしめ今
ね祈の。新同よ為しめるべし。
宝〻是より心付。身を省るもはのうん
とくば。栗之先生答〻曰各先徒等が志の鄙
者〻。手為を所の元信あるもを初
ゆべし。古人の活よ別揚を徒よ別戈
を為ど云〻。一徒よ志一引も新

切ぬ者よ清新の徒を。作り出し学少
あるべし。彼等が徒を能をとりよ資性
為して猥〻の人徒を為を変ずべ
又彼等〻を云ふ〻。新よ所の祈義高山
氏が輩い。中行ひて。彼等が如さ人の
よはべし。今五之天祇等が所い学よ従行
の徒偕士よ。培り情徒の釈為り
似つ〻の赤内の云紙を云る云

憩洞子光り輝き

◆火乃薦被りを拾へ盃

あどする微よい中〜もべ〜又歌ろ〜

今昔を味〜藝妓の奴隷雅楚の牽改とり

ぶ〜〜又早急詩人を以〜紀紐とする

る宋元以下志ろりと云へ古人詩の名あ

所以を高代詩を以〜科第を為る風俗

有豪傑英才の人るすべ〜るの習俗つ

る〜〜詩化多人る出来たるなり是要学

の衰〜〜て。人品鄙劣よ成〜〜嘯矢〜李白知

まゞ〜〜記雅君湧が如〜〜。強よ一行の称を

き学ぶを又〜〜。詩人の国家よ益ます〜わ

ひあさるを知〜人〜〜。然るを我国よ〜

る。詩を作り文を属るを。学官と為たるい徳

弊風を又得り。継〜りと必ず遺てるもの

し。然〜〜詩文作〜〜べくるも。よ〜〜とふ

よいあ〜〜ば。時を感〜〜ど〜〜奥よ学〜〜て。必

ぞ志をいふへし。古人の詩文大体志なり。
義を以て千載の後に詩文を作るなり。その
志を起さしむ。是その性情の誠より出
るゆゑ。性情私と唱へるものは一時の喜怒
哀楽ばかり。志を起さしむるの誠
なし。韓使が望洲亭に登りて彫陸魯堂を
ほめしは。ものを作るよりは先
づその人の志の如きを離れ汪洋の
別

とをいふ。又は席上客その景象をとりて詩を
作る孔仁玉が詩に来。都氏茅亭江東野亭の詩の如
きは自ら不自然。新亭の詩は走山元四の
作の如くさい自ら清。君義伯仙の作は自ら
厳なり。万居大湖集は自ら俗なり。次
第に軽なり。子礼遷子羽の集は自ら
雅なり。延来亭の如き作の如くは雅雅なり。
五三子の詩はすべて雅なり。

殺雜々しく、清新雅々たり。

陳亮至志の少年と遊ぶ時に、聖学日々に

おとろへ、国家太平の弊風しきりに盛用の俗人

多く出来る也。元々二子老の心相違也。

亀山の門、徒に偏々として偏に来

る。宋の往哲子始々聖学の旨を心得

ざる人、その人形のごとき世に比類なし。聖学を心得る者、先

宋学より入るべきなり。五子は心の学

初発林に入るべきなり。その志学々然

る事なり。今天下に是を

学ぶの人、庸愚多く太子中

井の門に入ると、同日の論又

知るべきなり。学ぶ必ずの道にて。

五子天民先覚なり。待人風流士と称ぬ拙

なきべし。此陳亮文昌星の仮あるを

予い筆をとり口を開く。

五三の作文二紙と。並記すと云へども。

その美麗すること。不[illegible]作法のあるを称賞す

べ。称ありへ[illegible]云へども。[illegible]すること。[illegible]時に

[illegible]すること[illegible]ず。[illegible]時に

無量のよろこび。[illegible]の子弟。

[illegible]名と慕ひ[illegible]風と[illegible]び[illegible]一廉

の結くと謂り。[illegible]孫[illegible]已の家業で

[illegible]風流とする所

[illegible]代々お付の家督と

先[illegible]。[illegible]ふ[illegible]田舎[illegible]で

[illegible]称[illegible]。結顔結狂[illegible]名[illegible]る輩。多

[illegible]を栗三先生の歌ゆ[illegible]。[illegible]る[illegible]

[illegible]古人。古今の作人を評[illegible]るゆ[illegible]。元

[illegible]の[illegible]を編ずべ[illegible]。

受業

浅[illegible]北精詰

野徹芳　識

宋紫石 東都の人。宋岳の子孫を伝へ、画を善くす。人のために、写之を精し。雷門孫伯、僑居より帰けるとき、人往くゆく移り酒宴を催す。

師朱睛、敬かに孫伯に曰、先生写之よ。

既ぬひ、ゆく。宋孫伯、香一人。

文趙が揚をえめさしる。作。一肝よ、まくのつる

ん。何ん、ある。徒に一体仏祖。画

物ぐむ人、ゆれば。先祖の弓かくと心中よみ。

百足い形。二百足い付と。元画をめ、ひ、

画の出来自。亦陰又、消ま。元

来好形あるもい。京都よ来有り。

月仙坊より。中ちく。

孫よ画家の通撃。まよ付お

こ作。大坂の人とる云。月仙よ

来り。出る名家り。及び。以前十と

り。好幸出画一枚。

仙人の人形の並べあるを見て。例のあぶり出し一枚を出し。礼附。懐中より金子五百疋出し。肉仙見を大きに驚き。是は痛入る由。挨拶呂今来たるに。除り礼画をもて。カレぞ。あよ。源吉。居られんと云けば。彼人数色を改め。こは先生の作なるぞ。私義画の義画いたせぐ。はる者

探出と云へる。多利出しをよく仕せ筆を仕せ。是は如何と申されける。席画しかる如りしに。探幽斉と申されける時の画は実に壱年より乃ち一向酒屋のよく成る。大よ絵無るをもの屋画先生。武庵山田平の画風を業とする。壱怪むへし。人曰庵画を学ぶ。三年ありて名人よ成。俗諺を学ぶ。

兩年。唐号を持て題考と成る。此二変を其の出来拙して。何とも体の有ざるもの也。

白山乃補談

可山猿米元章より別て其の門ちぢらぎとなる
ナ京より石出され。三百石の俸源を給たり。甲冑
を持て。絵一本のもと成りれだ。元章が童。お

真仁梅　識

猿まもりけり。出放歌と号す。碌〻區く
とそ〻〻〻る。かゝる。毒の毒〻男
〻る。顛風不羈のんる。小のうぬ拙子よ又く
〻〻る。閑雅平と後猿の語句。いろと京ド
有り。元章〻ち土つ保れ〻〻人〻れば。
さ〻堂〻語句も出こさで。惑ま〻〻〻〻
堂〻〻る打〻。何ぞ出る彫〻白山拉
現形をあひ。元章と偶〻曰ま方先と米

あるよ流〳〵。自己の姓を孫氏といくども。来あ
れよりも夢名射利の僧士あれへ。中〳〵自者の
寿を記さで。孫よを以論一本のもとなりへいよ
〳〵欲仏悟せ〳〵て。さるの特さよ叶べきま
はくるを。今〳〵彼が時よ遇きる仕合くといくども。又
是太平の一契くさるを元来あを禄〳〵亟〳〵と云な
〳〵たるを。今の身の上ばかりの毒よ拙よ
よるゝめと。我亟〳〵屋山と遠ひ。右位を以〳〵

るゝ〳〵とせば。右位るゝ〳〵さ〳〵ふかゝ〳〵。氏性を
以〳〵るゝとするく。米あ此上さるく苏壱用人拵を。
孫よ〳〵たれだるて。やるゝ禄〳〵亟〳〵みゝて。
るゝ〳〵とするよ是〳〵に。平えを石抱〳〵る。
亟るの古得〳〵わ〳〵。米あが罪みよかゝ〳〵ぞ。それ
無云い義くとつくども。亟亟の室とするよ是〳〵に。
孫よ我亟い弟嵐お孫〳〵。帝位を孫八十氏人武
なよ孫〳〵。文を以〳〵住助とするの〳〵武を表と

する屏風あり此上代三筆三蹟と号して称賞せる
人々は金銀布帛の価を惜まずして絵を求めつる。孫を祖父
に倒す。中比は家の武徳衰へ。その
中静かざりしころい書を愛ずること
なり。所々に多くあり。ばかりい編みや
加る。さけ。あくまで太平のいとまを知らず。外
武寛仁に偏へ。五十塗炭の苦を免れ万民太平を
楽むる今は三百年。倒れ屏風の武を戒

あり。侍従山画茶を嗜み。鞠の絵を能く学ぶ。
侍従上畏人侍従なり。下士庶人よりもる迫すべく
同じ拙きものなるとあり。是を太平の一端
と云。米あらめさ考ある源は石抱らるるとあり
北条石抱り。古方い裏代武功の古来は
なし。侍従の中みな二つ。大きを防ぎ
猛き古先代なり。七郎と称し。代々補佐の故
郎左衛門。古拙筆を失ひ。ざし

が當君吳よ七家の老臣にて坤ひたるや。来あ
をこ百石の俸祿を抱りよのこまくに。徒士の格
とこ。自足桂拔ってせらること隙。あるる者
遠く。歳代勤功の侍士の。坤よもん所こん付ぎる。仕
方とつふべー。高君条をよ熟んるる。系あろ格
南をうけ。泳を砌るよ及ぶ況僧代積
功の志所のめく。自足桂拔ってせゆふ何るぞ隙
仲山ふるるよ玩よ俸をふ。自とを。あふ

ものとうん。人必山孫を流後ーーありふとめを。
拔りふをるるる。

女人

未足斎　織

矢の食は皇詩

錦成先生蛆蠅のふを所の詩を見る。自者の滅
志所ふ。文昌星忽然と出来ふる。先生
内閣ふるるーー。侍文弄よ現人地獄おの通る。当
代の俳志画の名るる者。乗屋ゆ法の張

なり先生特立の見識より。徂徠のぬく抜出
あらふる世運にして。享保已来の人
物を卒人なよく考へ見て。才徳兼備する人
識なかりしいちんや。武家の蒙昧なりし人羲
個なる。元来当皇朝の武士を浮世と遠ひ別つ
儒家も立ざるをいかしなるかし。是以天子徐
きあるおく敵をも信先生仕へかの隣蘇
未し。勤玉ひしるる呉是武家の蒙昧の人をも当

一として。今の儒者の自慢驕傲のんとは掛別く。さ侵
先生の別ち儒者なといふ表向の格式にすく。民部の法
えしかく。語る孔の他より見へ。あとくの長中所と
気と。節を讃ぜしとさるゝなる時に声をすでに石
なかく。唯中き為りしより。先生より文歴代史
新古いのちを及び。稗官小説なるまでも皆和訓
を施し。疑獄その外。本国の古例を引。漢土抱
あるめとおり合せし。此言のなかしくの中にして。今の

傷寒論のんはうぬきく。然るに風岡先生卓聲
豪邁の氣はぬ。傷寒の初立方に執著の顔色を
形し。傷寒論建てくに植類し。傷寒烈記
宗り。諸学なる者の面目は上なりとく共。佐
階格式あるべ。ぬとくよりの古疑官ならるべ。
う成自然と何々なるをざう。法なる成へきなり
く成形しく。早えん制系なるの古法を魂
ひりるあるべ。法なるべ動ぬくべ墨く古側を

新々するぬ。怪きがめくあしと玄意なるの歩う。佐
階宗りくいを式なる方法例と朝々するるも難く。
まるるがめくあれと。限りるく部く怪し猫
又下と生る。傷寒本体佐ゆりたるが玄ゆし。能走
豪邁くとくべ。紀法と々なるるるく。雨寒の
子を紙ちべ。考寧苦の実くとくべるるるあ。
るるれ子遷が寧の結寒ゆが海あ。仁弟なる中体
るるの考えるくく。家路まるの新も正くく。

代よりの名を[illegible]井陸奥雲[illegible]
八曲庵よりの書[illegible]国家の[illegible]
その[illegible]兼山絶卿[illegible]一家の識[illegible]
[illegible]
若又彼徒よりの一[illegible]北こが傷侠[illegible]
[illegible]山中四方と朝[illegible]室内[illegible]
妙[illegible]強よ攘を[illegible]
[illegible]。[illegible]遠[illegible]室斉[illegible]唄
[illegible]。[illegible]の徒[illegible]。又贅倍を

[illegible]
[illegible]ば先生[illegible]めを教よ[illegible]の困[illegible]
既よ百日[illegible]入[illegible]一時[illegible]大人の儀[illegible]
伝[illegible]。[illegible]遇よ[illegible]。[illegible]動[illegible]
[illegible]の[illegible]。方[illegible]暗[illegible]地[illegible]を称[illegible]
[illegible]。[illegible]よ媚び[illegible]を実[illegible]。[illegible]
求め[illegible]よ[illegible]。[illegible]
大海[illegible]の識[illegible]。[illegible]よ先生の[illegible]。
[illegible]。[illegible]。[illegible]教

よ来りて。その堂名を問ふに。
堂代爵子なる。大傷と人なる弱すると陸に自
ら徒行の君子と成る。是偏に先大
人の恩あるにぞや。扨先大人の
の業仕に先生の失策に。いかゝとあれば子孫先
傳承なしゝ。一ッの面白
その志清く。強て面白
先生の拒まず。富子の徒と談じ。傳之郎

而少べし。必徒方の村学庸医ゞ。英他なる傷
傷や強者の解まとあるべ。
の金をとるるに止まして。
ゝ。ゝ。
ゝ。学者も扨角ゝ先生の扨
先年英学の発明。先人来発の
徒なり。世人又学者の一助
志ます。それ人徒あ

とゝ。命あけまゝば。全くゝ。潛水先生命者
のかゝるゝと信る内。重光一富よりちゝ白
雪のめく。文昌星の姿あへゝ見て。思ひ中ゝ
声ゝゝ曰。我又是ゝ雖はの法法。春田の釈
仁録孟の子。孔の面目人の八十畑ひよかゝ生
るゝ。出。好んく師ゝ園学を信ゝ
る。鳴呼人世ゝ世界ゝ捕ゝ捕ゝ。
俗世欲をすむ。又李子の羅漢中ゝ欲を養

ひ和歌の実ゝを得ゝ仏法と拙法と業ゝ名
を書ゝく今浦をほゝ。ゝ等の手屋捜さゝセ
猫ゝせんとゝ声をかけゝ。ゝゝゝとドロく
みかゝゝシヤギリ是関清年ゝ子の笑ゝる
みぞ是りる。

後歌の手下終

下七終